

1. 筑波研究学園都市建設にあたって総合研究所の設置を

2. “歩行者天国” 雑感

3. 台風 10 号, 四国・中国へ



1 9月1日「防災の日」NHKテレビの「マグニチュード7」をみて、都市防災のむずかしさを痛感した。科学技術の進歩とともに構造物の安全性は高められているが、その実情を多くの一般人に知らせることは重要である。その意味においてもこの番組は高く評価されよう。地震時もっとも問題になるのは地震に対する人間の反応ではなからうか。特に大都市に人口が集中している現在、マスとしての人間の行動は防災にとって重要な要素である。テレビでは筑波の大型耐震施設の振動台上に設置された台所の実物大模型に放送記者が入り、加振された。放送記者の生理機能の変化が測定され、また写真撮影を併用して、地震時の人間の行動を詳細にとらえていた。本人は実験であるため生命の危険はないものと信じていたと思われるにもかかわらず、生理状態の変化は著しく、マグニチュード6ぐらいから適正な判断に基づく行動をすることはできそうになかった。これがさらにマスとなればどのようなか想像するだけでもぞっとする。防災計画はいうに及ばず、各種計画の策定にあたっては人間に対する慎重な考慮が払われなければならない。幸いに昭和38年9月以来構想され、具体化の運びとなりつつある筑波研究学園都市の建設において、各種研究所が筑波にまとめられることになり、お互いが緊密な関連のもとに研究を進めてゆくことによる成果を大いに期待するものである。特に、人文・社会・自然のそれぞれの領域に止まるのみならず、これらがお互いに関連をもつような総合研究所の設置や総合研究体制の確立を希望するものである。

〔S〕

2 8月2日から毎日曜日は首都東京の代表的盛場である銀座、新宿、池袋、浅草および渋谷（8月16日からであった）は、時間と空間を限ってであるが、車を禁止し、歩行者のみの広場を持つようになった。これをジャーナリズムは“歩行者天国”と名付け、にぎあう有様を報道している。天国とは少々大袈裟であるが、確かに都内随一のにぎあう場所を遊びの場として使えるのは楽しいことに違いない。

これはまた、どんなに遊びの場所が貧弱であるかを示しているものである。人間の生活から遊びの要素をすべて取り去ったら、実に索莫たる光景を呈し、死の世界といっても過言ではない状況を醸し出すであろう。

東京に限らず日本の都市は遊びの施設が少なすぎて都市の魅力に乏しい。あまりにも空間の機能が限定されて——つまり立入禁止的——いて、自由にのびのびと使用可能な空間が極端に少ない。都市で一層愉快で楽しい生活を可能にする一つの条件として遊びの施設の増大をあらゆる物的計画に積極的に取り入れることを提案したい。

〔J〕

3 8月21日朝、高知県西部に上陸した台風10号は、四国を縦断、広島県呉市に再上陸し、中国地方を経て午後、島根県大田市から日本海へ抜けました。21日午後8時現在、警察庁調べでは死者行くえ不明23名、負傷者268名を出したのをはじめ、がけくずれ、家屋倒壊、浸水、漁場被害など、その規模も大きなものとなっています。特に高知県では、被害総額327億円という南海地震以来の災害となり、高知市では、7万5000戸のうち、4万5000戸が浸水し、いまなお浸水している区域が残っています。高知市における水害は、新しい型の都市水害を生み出しているようです。満潮時と台風が同時刻だったとはいえ、10号台風以上の勢力をもつ台風が常襲している地帯です。10号台風による以前より大きい水害は、従来と自然条件が変化したのが一原因と考えられ、次のような事実をあげることができます。浦戸湾の遊水面積の約3割が埋立てられ、湾入口、桂浜の対岸の種崎がけずりとられたということ。毎年、同じような台風が日本を襲ってきています。しかし、国土は、毎年その土地状態を変化させています。この場合、特定目的だけによる土地状態の変化は、ときがたつにつれ往々にして、当初の目的を無にする可能性をはらんでいるようです。土地利用の状態変化には、自然条件を十分考慮し、模型実験などを積重ね、時間の経過を見込んでうで決定すべきでしょう。

〔C〕